透谷の諸作品と「内部生命論」

白井伸昂

明治十八年坪内逍遙によって「小説神髄」「当世書生気質」が発表され、人情を写す写実主義が提唱された。それは勧善懲悪の戯作文学を排し自由民権の思想を伝えようとした政治小説の本質を否定し文学の自律性を唱った。だがその蔭に文学の主流が硯友社派の風俗小説に道を開かれる端緒を含んでいた。

二葉亭四迷は「小説総論」の理論、「浮雲」の小説の中で「小説神髄」に於ける写実が外面的模写・風俗的写実のわくを出られなかったのに対して現象の底にある本質的関連の追求によって人間に取って意味深い真実の把握に進み出た。それは近代文学の出発点とも言えたであろう。しかし四迷は作品制作途上で筆を放棄し文壇は紅葉、露伴を中心にして町人風な趣味性をより所とする近代文学の発展方向としては結局妥協的な硯友社が抬頭して来るのである。この様な状態の中で歴史的には不完全なブルジョア民主主義革命であった明治維新を経て天皇制絶対主義国家が成立し、その政府が侵略的体制の確立を急ぐ時期を背景に、基本的には飽くまでも現実の国家の歩みを肯定する逍遙の路線とは別に、自由民権運動にインスパイヤされて、彼等の路線を懐疑し否定し、始めて近代的な自我の伸張充実の方向を求める浪漫主義の先駆が北村透谷によってなされたのである。四迷の「浮雲」はこの二つの路線の岐路に立つ混迷より生れて来たといえよう。

少年時代自由に目覚めた彼は若くして自由民権運動に接したが大阪事件を機に文学への道を決した。政治にまで進んだ対社会への目は文学の上でも持ち続けられる。内部生命論を彼の評論の頂点と考えるとすれば、「内部生命」の存在を肯定するに至る彼の思想の遍歴を作品の流れに従って見なければならないと思う。彼が文学活動を始めた初期の二つの詩（「楚囚の詩」（明22）「蓬萊曲」（明24）、特に「蓬萊曲」には、彼の全思想の萠芽が見られる。それらの中で特に「内部生命論」に結論づけられる要素を抜き出し、「内部生命論」への展開を考える事にする。

(1)現世を牢獄と考える事

之は「楚囚の詩」「蓬萊曲」に共通し後の「我牢獄」（明25）に至ると内面的深化が増して行く特徴である。

(2)自己内面の矛盾の解決を全て死後の世界へ求める厭世観がある事。

「蓬萊曲」「我牢獄」に表現されるこの考え方は、「内部生命論」で否定される不生命思想と相通ずるものを持っているのは妙な事であるが、「他界に対する観念」（明25）、「一種の攘夷思想」（明25）に至る頃よりキリスト教的世界観が肯定され仏教批判がされるという思想の変化がなされつつ「内部生命論」で明らかな基礎を以て批判されたと見るべきであろう。

(3)いわば想世界・実世界の区別、内なるものと外なるものとの対立という考え方がある事。

人間の内にも外にも解決策は見出せないというこの分裂は「蓬萊曲」「厭世詩家と女性」

（明25）に見られるが、其処には底知れぬ厭世観と結びついている。

(4)人的なものと神的なものとの闘かいが人間の内面にはあるというキリスト教的対立の考え方がある事。

この(3)(4)は以後の作品の中で追求されつつ「内部生命」を見出す大きなモーメントであり具体的に後述する事にする。

(5)久遠の女性と恋愛の讃美

「楚囚の詩」・「蓬萊曲」に唱われ「厭世詩家と女性」で「恋愛は人生の秘鑰なり」と高々と女性への愛情を歌いあげた新しい考え方は彼の評論全てに表われている。

(6)既成文壇への攻撃

「当世文学の潮模様」（明23）等の評論では「書生気質」や政治小説を批判し、「粋を論じて伽羅枕に及ぶ」（明25）でも紅葉を批判する。この既成文壇への攻撃という特徴も「内部生命」の肯定とそれによる既成文学への批判で結論されているといえよう。

以上の様に「内部生命論」では数々の彼の思想的特徴が結論されている事が解るが特に(3)、(4)の要素を追求してみなければならない。人間の内面と外面とが分裂し、人的なものと神的なものとが分裂し解決策が見当らず死にのみ憧れる透谷は、「厭世詩家と女性」に至ると想世界のみ守ろうとする様になる。之等の二元的対立が内面的に観念的に解決され統一されるのが「各人心宮内の秘宮」「心機妙変を論ず」（明25）であった。「人間の心の深くには宮がありその奥にも他の秘宮がある。その第二の宮にこそ永遠の生命が存在しその中でこそ相対的な対立が心機妙変して一元的に解決される。」と主張されている。しかも以前解決の世界を死後の理想に思い描いて来た「神の如き性」と「人の如き性」との二元争闘もこの評論の中では積極的にその争闘の意義が見出され全く違った考え方になって来ている。

勿論その激闘は昏睡する様な状態に人を追いこむけれども、その間心機妙変がなされ第二の心宮内で解決されるというのである。極めて観念的な深さが増している。

人間の心の中に第二の心宮を肯定した透谷は「富嶽の詩神を想ふ」（明26）では自然の中に朽ちざる詩神を発見する。人間に秘宮、自然に詩神・自己の内外に観念的な肯定を見出した彼は「満足」（明26）の中でその総決算を試みた。即ち満足を得る為には、已れを知る→自然を観ず→人間を観ず→天を観ず→天命を知る事だというのである。人間と自然と宇宙とに渡る思考を注目して見る時、自然には詩神・人間には秘宮があると彼は説いた。更に彼は「頑執妄排の弊」に於て、宇宙は生命を持ち、人間も未来への希望をもつものであり、その人間最大の希望は全く宇宙の精神に合躰する事だと主張したのである。人間・自然・宇宙を自己の中でどう合躰、統一させるか、それこそが彼の今後の課題でありその結論こそ内部生命の肯定であった。

即ち「人間の秘宮の心宮の中に内部の生命が存在し、それは宇宙の精神、神なるものによる感応（インスプレーション）によって創造される」とする事によって、その生命の眼によれば「自然（造化万物）にひそむ極地も宇宙の精神も見る事が出来る」というのである。「内部生命」によって全てが統一し合躰出来、現世を牢獄と考えなくとも良く、相対的対立もなくなった訳であろう。観念の世界に於ける人間の自由・崇高性・普遍性の尊重であった。

この「内部生命」を基礎に、人間のヒュー

マニティーという特有性を述べ真の人生を説き、先にも述べた様に、仏教思想を不生命思想だと批判しキリスト教は生命思想だとする。

但し宗教としての宗教は何の意味もないと主張するのは、彼がキリスト教を信奉したというよりも彼の思想がそれと共通点を有していたと見るべき事であろう。

「内部生命」を基に、政治・哲学・道徳までも論じ文芸の本質を思想と美との統一による内部生命の表現だと論ずる。勧善懲悪への批判や功利主義文学観の批判は、既成文壇への攻撃として先に述べた通りであり、封建制への批判も「徳川時代の平民的思想」（明25）等を引ついでいるといえよう。更に彼は写実派・理想派についても内部生命を基礎に文芸上の二元的対立を統一している。

「内部生命論」はエマーソンの影響が強いが、今まで見て来た様にそれは彼の思想の全てを観念の中で昇華統一したものであり彼の作品の中で頂点にあるものといえよう。

「内部生命論」を機として内面的な沈潜に向い短い抒情詩が多くなって行くのが良い証拠である。しかし彼が一貫して述べている人間の解放や自由は想世界ではなされたとしても現実の社会にはとうていその場はありえなかったし、それ故にこそ彼の作品も観念的にならざるをえなかったであろう。

そして彼自ら「内部生命」の理論を作品の中にくだき入れる事はなかったし又他の作家によっても作品の中に具体化されなかった。

彼の作品の性格を纏めて見ると

(1)自由主義や個人主義を受けつぎ更にそれを拡大しようとした。

(2)無限追求の精神が現実的な世界よりも精神的な分野に拡大された。

(3)功利主義・勧善懲悪等を卑近な性情と見なし自然への憧憬・恋愛の讃美・人間性の解放を要求した。

(4)それ故にこそ社会と個人の関係に関心を持ち既成文壇に対抗した。

となるであろう。北村透谷こそ文学精神の本質的な純粋な日本に於ける最初の体得者であり、西欧に於けるロマン主義文学の本流的なものの光芒の一端が透谷の独特の体質を通じて日本文学史上に光ったのである。

その後への影響

彼の影響を見るにはまず「文学界」を考えて見るのが妥当であるが、日清戦争が始まっていた時、彼は自殺し、その後「文学界」は後期に行く程、現実への批判の目をなくし芸術至上主義的な転身が行われ、現実からの逃避が行われる。

又浪漫主義全体から見る時、評論の高山樗牛は透谷の最も重要な平和・自由の面を抜きにして国粋感情と結びつき国家主義のイデオローグと化し、日清戦争後の浪漫主義者といわれる国木田独歩も透谷の作品を発展なせたなどとは考えられなかった。

文学に身を投じてからも平和を発刊し、社会的な視野をたえず持ち続けた透谷が正しく引きつがれなかった原因は、一つには透谷自身が評論や小説の作品の上に、文学がどの様に政治と結びつくのか、人間の内面追求がどの様に、周囲と接するかという事を具体的に示さなかったことにありはしないか。又もう一つは彼の仲介者たるべきだった島崎藤村に責がありはしないかと考えるのである。

（一部三回生）

「信州文学旅行」ところどころ

京都を発つ時は星空さえ見えていたのに、名古屋から中央線を奥に進むにつれて小雨が散らつき始めた。七月二十日、一行は和田・水田・小島先生を迎えて総勢三十七名、信州文学旅行の第一歩は「新・青い山脈」のロケで知られる中津川から始まった。バスに揺られる事約四十分、馬籠に降り立ち、藤村堂を見学した頃には雨も小降りとなり、シャッターを切る姿が見られた。再び車中の人となり、諏訪湖のほとり島木赤彦の生家を訪れた。有名な老松を軸に構成されたこの家は晩年この地で過した赤彦にふさわしい落つきがあり、深い感銘を残した。第一日の終着点蓼科温泉は茅野からバスで約五十分の奥にある。流石にここまで来ると、都会の喧騒からは全く隔離された別天地で、涼しさを通り越して肌寒さを覚えた。その夜は山の湯に旅の疲れを癒し、翌二十一日はまず富士見高原に左千夫の句碑を訪ねた。小高い丘の上に建っているこの碑は同じ丘にある大きな赤彦歌碑と対照的で、ささやかながらもその人の面影を映し出していて面白かった。小淵沢から小海線にかかると、なだらかな高原がまるで絵巻物でも見るように次々と開けて行く。自然のもつ美しさと、その雄大さに何よりも感動した。小諸についた一行は取り敢えず懐古園への道を急いだ。古城を思わせる大きな門をくぐると、流石とうなずかせるものがあったが、動物園など雑多なものが入り込んでいるのがちょっぴり気になった。千曲川ももはや昔の夢はない。小諸城址に古戦場を偲び、藤村・牧水・亜浪・水穂らの文学碑にその人の面影を訪ねて小諸ホテルに投じた。期待した浅間も天候の具合で見えず、一杯の酒に文学会の今後を祝福しながら小諸の夜はふけていった。明けて二十二日は折悪しく雨模様の中を、藤村の「破戒」で知られる部落村や、信濃追分では堀辰雄の別荘などたずねながら軽井沢三笠山へと車を走らせたが、白樺の雑木林がかさかさと鳴る雨の別荘地帯の景観も悪いものではなかった。武郎が恋人波多野秋子と心中したという三笠山に有島の霊を慰めた一行は解散地軽井沢駅へと最後のコースを急いだ。雨は本降りになって来た。小雨は遂に嵐を呼んだようである。

（山田朗記）

第六回 日本文学夏季講座

本学恒例の日本文学夏季講座は本年も日本文学会・大学院日本文学研究会、一、二部日本文学研究会の共催により七月十一日から五日間清心館九号教室で開かれた。本年度は特に従来の夏季講座の枠を乗り越えて、文学を身近かなものとして考えてもらおうと、テーマもわれわれの生活と文学といった身近かな問題を選び、政治、歴史からベストセラー、映画、演劇まで広い分野に亘って問題を取り扱ってみた。つまり、文学の奥の間から茶の間への進出を試みたのである。結果はかなりの反響を呼び、殊に一般市民の聴講が目立ち、意義深いものがあった。

本年度の講師並に演題は次の通り。

〈十一日〉政治と文学＝本学教授国崎望久太郎氏、歴史と文学＝本学助教授山本幹雄氏〈十二日〉詩と生活＝詩人竹中郁氏、短歌と生活＝本学教授・歌人和田周三氏〈十三日〉児童文学＝大阪学芸大助教授弥吉菅一氏、民話＝奈良学芸大教授・本学講師土橋寛氏〈十四日〉大衆文学＝本学助教授梅原猛氏、ベストセラーズ＝京大人文科学研究所員加藤秀俊氏〈十五日〉映画と文学＝朝日新聞学芸部鳥海一郎氏、演劇と文学＝京大助教授菅泰男氏